

京のみやびと風狂と

——柴田錬三郎の「眠狂四郎京洛勝負帖」にみるダンディズム の一変奏——

山口 和彦

キーワード：シリーズ番外篇 語り口の妙 京のみやび ダンディズムの変奏
風狂の美学

I はじめに

柴田錬三郎の代表作のひとつにかぞえられる眠狂四郎シリーズは、昭和 31 年 5 月、第 1 作「眠狂四郎無頼控」の『週刊新潮』への連載から始まった。その後シリーズは「眠狂四郎独歩行」、「眠狂四郎殺法帖」、「眠狂四郎孤剣五十三次」、「眠狂四郎虚無日誌」、「眠狂四郎無情控」と続き、昭和 49 年 12 月に第 7 弾となる「眠狂四郎異端状」の連載が終了するまで、『週刊新潮』の看板小説としての地位を保ちつづけた。¹ “無頼”、“無情”、“虚無”、“異端”といった一見否定的なニュアンスを伴う語を表題に掲げながら、眠狂四郎という稀世の剣の使い手を主人公とするこのシリーズが 20 年近くの永きにわたって江湖の好評を博したのは、“花も実もある絵空事”²としての小説の面白さを追求した作者の創作姿勢とともに、作者の奉ずるダンディズムの美学を体現した異色の主人公像が多く読者の支持を得たことも大きかったであろう。連載が始まった昭和 30 年代は、戦後 10 年を経て社会の価値観が大きく変化しつつあった時代であり、それ以降ほぼ高度成長期と重なるように、老若男女の別なく幅広い世代の人々に読み継がれたことになる。

市井無頼の浪人者眠狂四郎の活躍を描くこのシリーズには、しかし上記 7 作のほか、いくつかの姉妹篇が存在する。『週刊新潮』連載の 7 作をかりにシリーズ本篇と呼びうるとすれば、連載の合間に不定期に執筆された、いわば番外篇ともいえる眠狂四郎ものである。創作順にあげれば、昭和 30 年代に発表された「狐と僧と浪人」、「悪女仇討」、「消えた凶器」、「花嫁首」の 4 短篇、昭和 44 年発表の中篇「眠狂四郎京洛勝負帖」、昭和 47 年発表の、「眠狂四郎市井譚の内」という副題をもつ 2 短篇「廣者助太刀」と「義理人情記」、そして昭和 48 年に発表された「のぞきからくり」の

計 8 つの中・短篇である。

本篇から独立したかたちで発表されたこれら 8 つの番外篇は、物語の舞台となる場所も時代設定もまちまちとはいえ、本篇との直接的もしくは間接的な係りを有している。また本篇との関連の有無は別としても、異人の血を引く特異な出生の秘密を持つ主人公の生い立ちにまつわる逸話や、本篇では語られない事実、出来事などを含んでいる場合もあり、その観点からも看過することのできない作品群といえる。小論は、シリーズ本篇を補完する役割も担うこれら番外篇のうち、京を舞台とする中篇「眠狂四郎京洛勝負帖」を取り上げ、本篇との係りにも言及しつつ、この作品の特質と文学的意義について考察することを目的としている。

II 物語の成立と梗概：大阪の豪商との対決

「眠狂四郎京洛勝負帖」は、シリーズ第 5 作『眠狂四郎虚無日誌』（新潮文庫刊）との関連性を有する作品である。「眠狂四郎虚無日誌」の週刊誌連載は昭和 44 年 7 月に終了したが、「眠狂四郎京洛勝負帖」は同年 3 月、『眠狂四郎京洛勝負帖』（廣済堂出版刊）所収の表題作として発表された。³ 本篇にあたる『虚無日誌』は、江戸幕府第 11 代将軍徳川家斉の治下、将軍家代理として上洛した世子家慶が江戸帰来後に人格を一変させる変事が起こり、何者かとすり替わったのではないかとの疑念が持ち上がった騒動を、眠狂四郎が解決するまでを描いた伝奇時代長篇であるが、この長篇の終盤近くに、本物の家慶の行方を探して京に上った狂四郎が、京都町奉行所の書院で奉行寺沢内膳正と対座する場面がある。

瘦せこけて、顔色のわるい、鷲鼻の、坐っていても、絶えず、からだのどこかの部分を動かしているこの町奉行とは、二年前に、知己になっていた。光格上皇が在す仙洞御所内に起った事件を、たのまれて、解決したことがある。

それは、内緒窮迫した御所が、美しい姫君を、大坂の豪商辰巳屋久左衛門へ三千両で、売った、といういまわしい秘密であった。狂四郎が、調べてみると、姫君は替玉であり、辰巳屋久左衛門は、替玉を承知で、三千両で買った、というのが真相であった。⁴

ここで言及されている「仙洞御所内に起った事件」の顛末を語るのが、中篇「眠狂四郎京洛勝負帖」ということになる。すなわち、この中篇は『虚無日誌』中の 1 挿話を独立した 1 篇の物語に仕立てたものであり、その意味では番外篇のうちでも本篇のスピノフとしての色彩が濃い作品ということができる。

さて、全 15 章からなる「眠狂四郎京洛勝負帖」のプロット自体は、それほど込み入ったものではない。時代設定は天保 5 年（1834 年）の春で、水野越前守忠邦が本丸老中に昇進してほどなくの時期にあたる。本丸老中として幕閣の中樞に座った忠邦は「幕府と禁裏との間に、数え切れぬほど積もった確執を解決しなければならぬ面倒な責務」⁵をも負うことになり、「かなりの頭数の密偵を、京の都に送」（8-9）

っていたが、千本通りに面した羅城門跡にある“千本屋”という「古い小さな旅籠」(8)の主人も、忠邦が送り込んだ密偵のひとりであった。物語はこの“千本屋”に逗留中の狂四郎が、駿河からきたという相宿の商人から声をかけられる場面から始まる。相宿とはいえ口もろくにきいていないその商人が、狂四郎に丹後の地酒をすすめてきたのである。「五十路を超えている」(10)と見える男を一目でただの商人ではないと見てとりつつ、狂四郎は地酒を味わい、相手の身の上話に耳を傾けて、彼としては珍しく自身の所在ない生き方についても語るが、そこへ京の事実上の権力者といえる京都町奉行寺沢内膳正からの書状が届く。

求めに応じて奉行所へ出向いた狂四郎は寺沢内膳正から、さる高貴の姫君が御所から行方知れずになったこと、しかし表沙汰にはできぬため、内々に探索して素性も知らぬまま救い出したかたちにしてもらえないかとの依頼を受ける。御所の内証が火の車であることは公然の秘密であったが、その「仙洞御所が、美しい姫君を、大阪商人に売」(16)った疑いがあり、どうやらそれに大阪の豪商が一枚噛んでいるというのである。

「対手が、大名ならば、公儀隠密も、働くすべを心得て居るが、大阪商人では、しまつがわるい。なにせ、鼠のように要心ぶかく、牛のように辛抱づよく、貝のように口がかたく、狡猾さに於いては狐狸以上の手輩だ。第一、うなるほど、金を持って居る。わしは、大阪町奉行を、十年勤めた。大阪商人どものしぶとさ、ずるさ、頭のよさを、イヤという程知らされて居る。お主のような八方破れの無頼者でなければ、太刀打ちできるものではない。」(15)

奉行の虫のいい申し条に、一度は断りを入れた狂四郎であったが、書院の天井裏で二人の会話を盗み聞きしていたという唐兵衛から、じつは自分は盗賊で、狂四郎の命を狙う仕事を百両で請け負っていたが、一分の隙も見せない狂四郎の起居に兜を脱ぎ、このうちは奉行から依頼された仕事を手伝わせてもらいたいとの申し出を受ける。それに対して狂四郎は明言を避けるが、島原の廓で唐兵衛の勧めてくれたしぎ野という淡路島出身の敵娼あいかたから、唐兵衛も同郷で、子供の頃に淡路から駿府へ渡ったことを聞き、さらに唐兵衛の様子から公卿に対して何やら敵愾心を抱いているらしいことを感じとる。廓の娼妓とはいえ、「すれたところはなく、こまかな心遣いをする小さなしぐさにも、心がこもっている」(21-22)ことを感じさせるしぎ野は、御所や公卿の館に仕える同郷の者たちの言い尽くせぬ苦労や悲哀を知る複雑な胸中を垣間見させるし、唐兵衛の方は、御所で羽織袴の仕丁を勤めていた実弟が、ある年の夏、男の一物を切り落とされた無残な死骸となって戻ってきて以来、公卿に対する意趣を抱いてきたのであった。

御所の五位侍、六位侍らを従えた内大臣中院為徳が、直衣すがたのまま廓へ乗り込んでくるのはその折である。中院為徳は、狂四郎を御所から二千両を奪った盗賊呼ばわりして、隠し場所を白状せよと迫る。何者かの密告を受け、壬生狂言の棧敷

席から一散に駆けつけてきたものらしかった。狂四郎はすぐさま、それが唐兵衛の仕業だと直感する。奉行の依頼を引き受けようとせぬ狂四郎の腰を上げさせるべく、非常手段に訴えたのである。狂四郎は苦笑すると、供侍たちを軽くあしらひ、「盗賊呼ばわりされたおかげで、大金の出所を突き止める料簡に相成った。覚悟をして置いて頂きたい。」(30)と云い残して“千本屋”にもどる。直ちに姿をあらわした唐兵衛は、泥棒に仕立てた非礼を詫びるが、「一人の盗賊によって踊らされることになったおのれ」(32)に自嘲の念を覚えつつ、狂四郎は幕の上がった芝居に一役買うことを承知する。

こうして狂四郎は真相の究明に乗り出し、ほどなく姫宮を買った者の正体を知る。「大阪屈指の両替屋」で、「鴻池、加島屋、平野屋とならぶ大町人」(37)の辰巳屋久左衛門であった。姫宮の身柄はすでに大阪へ移されているとも考えられたが、狂四郎は持ち前の勘を働かせ、久左衛門が秘かに静養にきているという京にある別荘にかくまわれている可能性もあるとみて、唐兵衛の案内で衣笠山麓の辰巳屋の別荘へ向かう。そこは、かつて内大臣の地位にあった人物が館を構えていた場所で、松の疎林を抜けて「風雅なたた住まいの屋敷の前に立つと」(45)、狂四郎は唐兵衛をそこに残して独り邸内へ忍び入る。大町人の身辺警護が大名以上に厳重であることは承知していたが、「常に、おのが身を危険な場所にはこび入れることによって、事を片づけ」(46)るのが、狂四郎の流儀であった。

母屋の雨戸をはずして狂四郎が庭から縁側へ上がると、とたんに左右から鈴の音が起こり、はせ参じた若い女中二人に短筒で狙いをつけられる。囚われの身となったことをみとめつつ、「あるじのところへ案内してもらおう。」(47)と狂四郎が求めると、別の部屋から年配の女中が現れ、狂四郎は前後から短銃を突きつけられたまま、とある部屋へ引き据えられる。そこは「武家の屋敷には見られぬぜいたくな」造りの部屋で、「欄間を泳ぐ錦鯉は純金」、「床の間には、獅子台の和蘭時計が、ゆっくりと時を刻んでいた。」(48)

ほどなく姿を見せた辰巳屋久左衛門は「町人らしからぬ、堂々たる偉丈夫」であった。狂四郎が「辰巳屋、高貴の姫宮を買った存念を、きかせてもらおうか。」と質すと、久左衛門は「買ったのではなくて、売りつけられた」(49)のだと主張し、こう見得をきる——「てまえは、ごらんの通り、商人でありましてな。始末、算用、才覚で生きて居ります。損を覚悟で取引をする、などということは考えられません。……たとえ絶世の美女であっても、二十年経てば、男は振り向きもせぬ婆さんになる。それに引き換えて、三千両は二十年経っても三千両。これア、取引にはなりませんまい。」(50)それでも狂四郎が、二千両で姫宮を買いもどきたいと逆に持ちかけ、こちらの要求が「通るか、通らぬか——女中どもに、一発、撃たせてみるか？」と挑発すると、久左衛門は「おのぞみなら——」(51)と応じ、すっと座を立った次の刹那、二挺の短銃が火を噴く。しかし一瞬早く前後の畳を片手と刀の鐙で跳ね上げて弾を防いだ狂四郎は、風の迅さですべり出て、九左衛門の咽喉もとへ無想正宗の切っ先を擬する。短銃が一発籠めであることをすでに見抜いていたのである。

瞬時に形勢を逆転させた狂四郎は、久左衛門を先に立て、白絹で顔を包んだ姫宮

と初めて対面する。自分と引き換えに辰巳屋が三千両を払ったことは知っているが認めつつも、姫宮は御所へもどることを拒絶する。「人身御供の立場に置かれた正常無垢の乙女が、なんのはばかりもなく、貧しさがいやだから町人の妾になっても、ぜいたくなくらしをしたい」(55-56)と告げるのである。さすがの狂四郎も言葉に窮して連れ帰るのをためらっていると、そこへ「眠さま、手ぶらで、お帰りがさるか？」と辰巳屋が声をかける。「そういうことに相成った。」(56)と狂四郎はわるびれずにみとめ、「これで、勝負がついたわけではない。(中略) どういうものか、おれという男は、自分でも思いがけぬ局面展開で、勝つようにできている。今度も、そういう気がする。」と云いおいて脇を通り抜ける。そのいさぎよい態度に「男が惚れなくなる男というのは、ああいうのか。」(57)と、狂四郎の後ろ姿を見送りながら、辰巳屋はつぶやきをもらすのである。

III 剣戟描写と物語の梗概：明かされる二つの真実

辰巳屋久左衛門とのやりとりが、狂四郎のいさぎよさと外連味のない人柄を現しているとするれば、五尺の長剣をつかう天心一刀流の剣客南紀市兵衛との対決は、狂四郎の冴えた剣技が披露される場面である。辰巳屋の別荘できかされた姫宮の言葉への鬱憤ゆえか、したたかに呑んだ狂四郎が、霧に包まれた松林の中を懐手でゆくりと歩いていると、霧の中から生まれたように行く手をさえぎる人影が現れる。

宙を截って、長剣が唸った刹那、狂四郎は、反射的に、数尺を跳び退った。背中が松の幹にぶつかり、よろめいたところへ、凄じい第二撃が襲って来た。首ひとつひねって、辛うじて躲した狂四郎は、敵の業の冴えに、酔いのふとぶのおぼえた。

一颯の刃風の中で、松の幹が両断され、悲鳴のように枝葉が鳴って、地へ墜ちた。

その時、狂四郎は、次の松に倚っていた。

松と松の間隔が、五尺の長剣の横薙ぎの業をはばんでいることに、ようやく気がついて、狂四郎は、にやりとした。

(中略)

間合がきまるや、狂四郎は、無想正宗の刃を上にかえした。

南紀市兵衛は、一步踏み込みざま、

「えい！」

凄じい気合とともに、斬り下した。

瞬間——狂四郎の身が沈んだ。

五尺の白刃は、狂四郎が後楯にしていた松の幹を縦に裂いて、狂四郎の頭上へ、紙一重で停った。

松もろとも狂四郎を両断しようとしたのは、よほど膂力と気合に自信があったことである。

もし、狂四郎が、身を沈めなければ、その予測通りに、両断されていたに相違ない。

狂四郎は、振り下されて停止する高さを、正確に知って、身を沈めつつ、刃をかえした無想正宗を、はねあげていた。

南紀市兵衛の顔面は、ま二つに割れて、血汐を、霧の中へ華やかな飛沫にした。(58-61)

強敵をしりぞけた狂四郎が唐兵衛の所有する草庵にもどると、辰巳屋の別荘から土産物を貰い受けてきたと、唐兵衛が告げにくる。奥の部屋の床柱へ細紐で後ろ手にくくりつけられていたのは、「これほど完全に整った美貌を持つ女性が、この世にいたのか、と一瞬われを忘れ」(62) させるほど藤たけた姫宮その人であった。細紐を解いて自由の身にしてやったのち、「この手が、顔ほどに美しければ、このような狼籍は、恐れ多くて、働きはいたさぬが……」(63-64) と、狂四郎が因果を含めるような言葉をかけると、姫宮は観念した様子で抵抗の構えをすてる。狂四郎は女身をその場へ押し倒して容赦なく裳裾を左右へ散らせる。そして半刻ののち、水仕事で荒れた手の肌理と艶事から、相手が無垢ではなく、本物の姫宮でもないことを確信する。公卿の何某かが手をつけた宮中人のひとりであろうとの狂四郎の見立てであった。「替玉と判れば、御所へかえすことはない。辰巳屋の別荘へ、送りかえしてやってくれ。」(67) そう云うと、狂四郎は横になり、手枕して目蓋を閉じるのであった。

最終章は、時が移り「急に、肌が汗ばむ季節」(67) を迎えた時節を描いている。清水坂の支坂にあたる三年坂という、ここで転んだ者は三年のうちに寿命が尽きるとの迷信がある坂を狂四郎が歩いていると、途中で葛餅を売る小さな茶店があり、前を行き過ぎようとしたとき、「お寄りなさいませ」と美しい声がかかる。ふと視線を向けた先に狂四郎が見出したのは「まぎれもなく、姫宮——いや、姫宮の替玉となっていた娘」であった。「眉を落し、歯を黒く染め」て、「赤い前掛けをつけた茶店の女あるじ」の出立ちになっていた。「ここのおかみになっているとは、意外だ。」(68) と狂四郎が怪訝のまなざしを向けると、あるじに命じられておかみをつとめているという。そのとき奥から「お京、できたよ。」と呼ぶ声がきこえ、「あれは、辰巳屋ではないのか？」と問うと、「隠居して、ここに移ってきて居ります。」(69) との答えであった。

それをきいた狂四郎はすべてを合点する——「辰巳屋は、替玉と知っていて、三千両で買ったのだ」、「あらゆるぜいたくをつくしてみて、ふと思いついた隠居ぐらしが、この小さな茶店であったのだ。」(69) と。「そうか。あの折、すでに、辰巳屋の心の裡には、この茶店で、この娘とくらす計画が、あったのだ。」(70)

狂四郎が茶代を置いて腰をあげると、女あるじは「有難う存じました。」と、ふつうの客を送り出す態度で頭を下げる。

それが、狂四郎には、気持がよかった。

「おころびなさらぬようにお気をつけなさいませ。」

その言葉に送られて、歩き出した狂四郎は、

——京のくらしもよいものだ。

そう思った。(70)

かつて作家の遠藤周作は、『眠狂四郎無頼控（一）～（六）』（新潮文庫刊）の解説で作品の人気の理由について考察したさい、理由のひとつに“刺激的に仕組まれた構成”を挙げ、次のように評している——「柴田氏の小説はもともと『ドンデン返し』を得意とした作品が多い。『ドンデン返し』といっても柴田氏の場合は更に手がこんでいて『結んで、ひっくり返して、更にもう一度ドンデン返しをやる』という構成が多い。つまり、オー・ヘンリーの短篇やリラダンの短篇によく使われる手を更にもう一段、刺激的に仕組むのである。」⁶

遠藤がこう評した語り巧者としての柴田の本領が「京洛勝負帖」でも存分に発揮されていることは、物語の梗概からも窺われるであろう。青春時代からプロスペール・メリメ、ヴィリエ・ド・リラダン、オスカー・ワイルド、エドガー・アラン・ポーらの作品に親しみ、エトネ、メチエ、機知、逆説、アフォリズムなどにも通じていた柴田は、何よりも虚構としての小説の面白さについて一家言をもつ作家であった。“花も実もある絵空事”という評言はその小説観の端的なあらわれであるが、この中篇でも大金と引き換えに高貴の姫宮を譲り渡すという卑俗な取引の背後に、姫宮が替玉であったこと、そしてその事実を知りながら「始末、算用、才覚で生きて」きた商人が替玉の娘を引きとり、意外な転身をみせるという二つの真実が隠されたかたちの構成になっている。

IV 京のみやびとダンディズムの主題の変奏

しかし「京洛勝負帖」の文学作品としての特色は、“花も実もある絵空事”としての結構の妙にのみ見出されるわけではない。捻りをきかせた筋立てと不可分に結びついているのが、眠狂四郎、辰巳屋久左衛門、姫宮の替玉となった娘の三人を軸にくり広げられる人間模様で、そこに本物と替玉をめぐる主題⁷を絡めつつ、人生の光と影が織りなされていく。盗賊としての正体を明かして以降、狂四郎につき従う唐兵衛や、唐兵衛と同郷の娼妓しぎ野らの身の上が物語に陰翳を加えていることも言い添えておくべきかもしれない。紙数も限られたこの中篇では、シリーズ本篇にみられるような雄大なスケールの物語は展開しないが、それでも事件の鍵をにぎる辰巳屋と主人公との対立の構図はこの作品の核心であり、結末で明かされる久左衛門の意外な身の振り方が、世俗の羈絆にとらわれない生き方を貫く主人公のダンディズムの美学と相呼応する趣向になっているのである。

ここで物語の結びについて再考してみるならば、姫宮が贗者であったこと、そしてそれを承知で辰巳屋が不当な取引に応じて贗姫宮を引きとり、自身も隠居して小さな茶屋の主人になるという、その展開の意外さもさることながら、眠狂四郎作品

としては珍しく静謐で、穏やかな締めくくりとなっている点が注目される。古都に息づく伝統と、日々の暮らしにも浸透する所作や言葉づかいの様式美が、狂四郎の胸中の快味と融けあい、心地よい余韻を残すといえればよいであろうか。物語の舞台である京の街が、主人公をはじめとする作中人物たちの生きざまをひととき印象的に浮かび上がらせるのは、このような文脈においてである。シリーズの番外篇たるこの物語は、あるいは「京のくらしもよいものだ。」という主人公の最後のつぶやきを導き出すために構想されたのではないか——読者をしてそう思わせるほど、京の街があたかも物語のもうひとりの主人公であるかのような存在感を見せている。京洛という土地が影の主演であるというような言い方は、たしかに奇異に聞こえるかもしれない。しかし誤解をおそれずにいえば、この中篇の持つもうひとつの特質は、京の都に受け継がれる伝統とみやびな気風が、そこに生きる人々の心組みや言動にまで影響を及ぼし、おのずからそれにふさわしい行住坐臥を身につけさせることを虚構の物語宇宙の内にさりげなく封じ込めているところにある。

この作品が「眠狂四郎京洛勝負帖」という題名を持っているのは、決して理由のないことではない。本篇にあたる『眠狂四郎虚無日誌』が江戸を主たる舞台に、次代の将軍家をめぐる騒動を終結させる主人公の活躍を描いているとすれば、「京洛勝負帖」は江戸とは異なる伝統と土地柄を有する京を舞台に、狂四郎、辰巳屋、麿姫宮を中心とする人生の機微を写し出している。いわば機能共同体としてのゲゼルシャフト的性格を持つ江戸と、地域共同体としてゲマインシャフト的性格をそなえ、伝統を重んずる気風を受けつぐ京との対比を、そこに見てとることができるかもしれない。⁸あるいは本篇と番外篇という観点から、江戸っ子の粋と都人のみやびを、作品の味わいの違いとして指摘することもできるであろう。

いずれにせよ、京都所司代との関係や京都町奉行所の職掌、⁹ 京に伝わる民俗芸能のひとつ壬生狂言についての解説¹⁰などを交えつつ、古都の風雅な雰囲気と、街を包むしっとりとした情緒を伝える言葉を、作者は随所にちりばめている。「他国者を排斥する気風のつよい都」(8)という表現もみられる一方で、「京都の雅な風趣」(36)とか、「古きを尚び、由緒を重んずるのは、土地柄であろう…」(20)とか、「江戸の吉原とちがって、歌曲も雅で、したがって、三絃も派手ではなく、万事しとやかに立ち舞う…」(20)といった叙述や文言が認められるし、若く未熟な5人の剣士を主人公が峰撃ちで打ちすえる場面では、「狂四郎のような男にも、古歌になじんだ景勝の地を、血汐で染めることをはばかる気持が働いた、といえる。」(36)といった一文も見える。また名所旧蹟に事欠かない洛中洛外でも、たとえば吉田兼好がその西麓に庵を結んだという雙ヶ岡が、「京の都の郊外でも、この雙ヶ岡は、松樹のたたずまいに、いちだんと風趣があって、(中略)つつじが咲く季節には、その松かげに夕陽が映えて、つつじときそう景色など、われを忘れさせるほどの美しさであった。」(33)と描写されるほか、次のような何気ない日常を写した光景にも京の街の空気が的確にとらえられている。

京でなければ見られない、おっとりとした面差のむすめであった。

「ようこそ、おこしやす。」

そっと、お茶をさし出すしぐさに、京女独特の和らかさがあった。こうした神妙な風儀は、江戸では見受けられぬ。

——京に、十日も逗留すると、なんとなく、呆けて来るようだ。

狂四郎は、春の鳥がのどかにさえずる景色に眼眸を送って、そう思う。(34)

そして、このような京のみやびを脅かすようにその存在を誇示するのが、有り余る財力を後ろ楯にわが世の春を謳歌する大阪商人たちである。

金がすべてを支配する、という考えが、大阪町人の一切の行動の根となっているのであった。

江戸に、「天下の旗本」がいるならば、大阪には、「天下の町人」がいるのだ、という誇りも、金力が武力にとってかわったという現実を、身をもってさった大阪商人の根性のしぶとさが生んだもの、といえる。(43)

京の風趣とは似つかわしからぬ価値観を示すこの一節は、物語の中盤に配されて大阪商人の財力のすさまじさを印象づけるとともに、結びで明かされる辰巳屋の決断をいっそう際立たせる布石ともなっている。

ここで「京洛勝負帖」とダンディズムの主題との係りに言及しておくならば、18世紀初頭の英国に誕生し、主としてフランスで深い内面的意味を見出されたダンディズムという近代的存在方式は、「他人に似ることを厳しく警戒する独創性の追求によって、真価を発揮する」¹¹ 精神主義の一形態である。所作、言辭、衣装、食事、住まいなどに洗練された趣味を示す一方で、独創性の中にも節度を重んじ、反順応主義のうちにも品位を尚ぶ¹² ところに、精神の貴族主義としての特質¹³ がある。いいかえれば卑俗、野暮、半可通などの対極にある品位、粹、洗練、典雅、瀟洒といった価値を尊ぶのがダンディズムの要諦にはほかならない。こう考えてくるとき、法外な取引を持ちかけられながら、相手の土俵でしゃかりきになって四つに組み合う愚を避け、余裕ある姿勢をみせて自身の価値の基軸を転換し、精神の自由に生きようとする辰巳屋久左衛門の姿勢には、風狂の美学ともいべきダンディズムの主題の変奏を見てとることができないであろうか。ここにいう風狂とは、『私たちが縛る世俗的なもの（常識、所有物、家族など）からの自由』を意味の中核」とし、「自由を求めて世間から逃走するのではなく、すでに精神の自由となっているために世間の規範を超越する」心的態度の謂である。¹⁴ とすれば、豪商の身分を棄てて小さな茶店の主人に転身する、その酔狂とも遊興とも見える生き方には、やはり大人の余裕に裏打ちされたこの自由な精神の発露を認めることができるように思われる。

「滅びには美学がある」と題したエッセイで、柴田は戦国武将の真田幸村や江戸中期の大石良雄ら赤穂四十七士の生きざまに“滅びの美学”を見ると記した上で、みずから滅びへの道を志向した者の例として紀州の豪商紀伊國屋文左衛門をあげ、次のように記している。

こうして華やかなインフレ元禄期に、ようやく、不況の風が吹きはじめた時、紀伊國屋文左衛門は、突如として、店をたたんでしまった。

没落したのではない。紀文自身、紀伊國屋を滅してみせたのである。

千人以上の雇人に、生涯困らぬだけの金をくれてやり、自分は、浅草寺境内の片隅の慈昌院の草庵に移り住んだ。二間きりであった。

(中略)

紀伊國屋文左衛門には、心意気というものがあった。

その心意気が、根本中堂を建立させて巨富を得させ、途方もない豪遊をさせ、突如として店をたたませて裏店住いさせた。

私は、「滅びの美学」を実行したのを、紀文の晩年にみる。¹⁵

全財産を手放して裏店住いをした紀伊國屋文左衛門の心意気を、そのまま「京洛勝負帖」の辰巳屋久左衛門の隠居暮らしと引き比べることはできないかもしれない。隠居したとはいえ、久左衛門には若妻のお京がおり、暮しに不自由のない蓄えも用意されていたと考えられるからである。しかし商いの第一線から退いて目立たぬ茶店の主人として市井の片隅に生きる道を選ぶ辰巳屋の決断には、「世間の規範を超越する」精神の自由にも通じる闊達さがあり、だからこそ作者は久左衛門の引き際の美学を、社会のしがらみから自由な独歩者として生きる狂四郎のダンディズムと響き合わせたとはいえるのである。

V 結びにかえて

眠狂四郎シリーズは、日本的ダンディとして造型された主人公の人間像、とりわけその孤独の美学を中心に構築された伝奇時代小説群である。その小説宇宙の中心に位置するのは、基本的には武士の生きざまであり、その価値秩序であるが、ダンディズムが本質において精神の美学としての側面を持ち合わせている以上、それを体現するのが侍や武士ばかりでないことは自明であろう。柴田も指摘するように、身分や職業、財力、性別、等にかかわらず、「『美学』は、自分自身の人生の中に、常に存在している」¹⁶ からである。

「眠狂四郎京洛勝負帖」が発表された昭和44年当時、作者の脳裡にはエコノミック・アニマルと揶揄されることになる高度成長期の日本人のすがたが想い描かれていたかもしれない。にもかかわらず、いやむしろそれゆえにこそ、それを逆手にとって富裕な商人が見せる意外な身の振り方を、自由の精神に裏打ちされた風狂の美学のあらわれとして、狂四郎の孤独の美学のかたわらに配したともいえるのである。辰巳屋の退隱はどこまでも利害得失とは無縁のものでなければならなかった。また替玉となった娘の心組みもあくまで未練げのない潔いものでなければならなかった。そうであってこそ二人の生きざまは主人公のダンディズムと響き合い、「京のくらしもよいものだ。」という述懐に引きとられていくのである。

もともと「眠狂四郎京洛勝負帖」は、シリーズ第5作『眠狂四郎虚無日誌』のスピノフ的作品として誕生したものである。中篇としての規模からしても、本篇のような壮大な交響乐的調性は奏でられてはいないし、波瀾万丈の出来事も緊迫感にみちた場面も満載されているわけではない。しかし小品とはいえ、独特の妙味をたたえるこの中篇は、眠狂四郎シリーズの主音であるダンディズムのモチーフをあざやかに変奏しているという意味で、シリーズを補完するに足る室内乐的佳篇と称することができる。

注

¹ 「眠狂四郎無頼控」と「眠狂四郎無頼控 続三十話」の計130話が『眠狂四郎無頼控（一）～（六）』（新潮文庫）として新潮社から刊行され、以降のシリーズ6作品もすべて新潮文庫に収められている。

² 柴田の文学の師であった佐藤春夫の言葉とされる。尾崎秀樹「解説」、柴田錬三郎『眠狂四郎孤剣五十三次』、新潮社〈文庫〉、1978年、750頁を参照。

³ 「眠狂四郎京洛勝負帖」の正確な執筆時期は定かではないが、『眠狂四郎虚無日誌』とほぼ同時期に構想された可能性はあると考えられる。なお、昭和44年に廣済堂出版から刊行された『眠狂四郎京洛勝負帖』所収のこの表題作は、その後『眠狂四郎京洛勝負帖』（新潮文庫刊）、『新篇眠狂四郎京洛勝負帖』（集英社文庫刊）に収録された。

⁴ 柴田錬三郎『眠狂四郎虚無日誌』、新潮社〈文庫〉、1979年、505-506頁。なお、引用文中のルビは省略した。

⁵ 柴田錬三郎『眠狂四郎京洛勝負帖』、新潮社〈文庫〉、1991年、8頁。これ以降、本文中の引用後の括弧内の数字は同書の頁数を表すものとし、引用文中のルビは原則として省略した。また同頁から複数の引用を行う場合は、その頁からの最後の引用の後にのみ頁数を記すこととする。

⁶ 遠藤周作「解説」、柴田錬三郎『眠狂四郎無頼控（六）』、新潮社〈文庫〉、1976年、188-189頁。

⁷ 本物と替玉をめぐる主題は、眠狂四郎という仮名をつかう主人公自身のアイデンティティの問題を通じて、眠狂四郎シリーズ全体にもかかわる文学的主题のひとつであるが、「眠狂四郎京洛勝負帖」と本篇にあたる『眠狂四郎虚無日誌』の両作品でも、この主題の変奏を見とることができる。すなわち、『虚無日誌』では徳川家慶の双子の弟である徳川敏次郎が兄と入れ替わったのちも悪行を重ね、最終的には自ら招いた因果によって身を滅ぼすという結末にいたるのに対して、「京洛勝負帖」では姫宮へのなりすましが必ずしも悲劇的な結果を生むわけではない。いや、それどころか姫宮が替玉であることを承知で、辰巳屋が大金と引き換えに贖姫宮を引きとり、しかも自身も商いの第一線から退いて娘とともに小さな茶店の主人に転身するという描き方になっている。いうなれば本篇のモチーフの逆ヴァリエーションが「京洛勝負帖」には噛み合わされており、そこに「始末、算用、才覚で生きて」きた豪商の、損得を度外視した身の振り方が重ね合わされて、主人公のダンディズムと呼応し合う趣向になっているのである。

⁸ 養老猛『京都の壁』、PHP 研究所、2017年、52-57頁や62-64頁等を参照。たとえば同書の54頁で、著者は次のように述べている——「こういう機能共同体『ゲゼルシャフト』の典型が

東京です。東京は機能主義に偏りすぎているのです。京都ももちろん、大きな都市ですから『ゲゼルシャフト』の面も持ち合わせていますが、山や川といった自然を感じられる場所もごく身近にあって、場所の共同体『グマインシャフト』が色濃く残っています。」

⁹ 柴田『眠狂四郎京洛勝負帖』、12-13頁。

¹⁰ 同書、26-27頁。

¹¹ 柴田錬三郎「賭博者はダンディであるべきだ」『眠堂醒話——地べたから物申す』、新潮社、1976年、184頁。なお、柴田錬三郎のダンディズムやダンディにかんする言説については、同書、184-88頁のほか、「ダンディズム論」『柴田錬三郎選集第十八巻 随筆・エッセイ集』集英社、1989年、158-63頁、「ダンディについて」『どうでもいい事ばかり』集英社、1978年、240-41頁などを参照。

¹² エミリアン・カラシユス、山田登世子訳『ダンディの神話』、海出版社、1980年、39頁。

¹³ ボードレルの「ダンディ」と題する小文に次のような一節があることは夙に知られている。「ダンディズムとは、思慮の浅い大勢の人々がそう思っているらしいような、見だしなみや、物質的な優雅を法外なところまで追求する心、というのともまた違う。そうしたものは、完璧なダンディにとっては、自分の精神の貴族的な優越性の一つの象徴にすぎない。」シャルル＝ピエール・ボードレル、阿部良雄訳「現代生活の画家」『ボードレル全集IV』、福永武彦編集、人文書院、1973年、321頁。また“ダンディの始祖”といわれるポー・ブランメルや19世紀末の英国のダンディズムについては、Ellen Moers, *The Dandy: Brummell to Beerbohm* (London: Univ. of Nebraska Press, 1960), pp.17-38 及び pp. 287-314、Ian Kelly, *Beau Brummell: The Ultimate Dandy* (London: Hodder and Stoughton, 2005), pp. 466-484 を参照。

¹⁴ 『日本大百科全書 20』、小学館、1988年、69頁。なお、唐木順三は風狂と風流についてこう記している——「風狂も風流も世俗に對立する概念である。世俗から逸脱している。世俗の常識をもって健康とするからこそ、風狂は狂でもあり、變でもあることになり、風流は世俗の用を無視するからこそ、夏爐冬扇ともなるのである。遁世出家といふことは風狂風流と結びついてゐる。反社會的、反世間的といはねばならない。」「事実と虚構」『詩とデカダンス』『唐木順三全集第四巻』、筑摩書房、1981年、43頁。

¹⁵ 柴田錬三郎「滅びには美学がある」『眠堂醒話——地べたから物申す』、新潮社、1976年、80-81頁。

¹⁶ 同書、76頁。

(信州大学 総合人間科学系 全学教育機構 教授)
2018年1月12日受理 2018年2月5日採録決定